

集下』、しかも長宗我部側の立場から作成された点も考慮するならば、むしろ後者の可能性を信頼しうる一次史料にもとづいて検討してゆくべきであろう。議論を先取りするならば、以下で検討してゆく一次史料の所見によると、後者が妥当であると判断せざるをえない（拙著『長宗我部氏の研究』）。

周知のとおり天正十二年には小牧・長久手の戦い<sup>\*</sup>が勃発しており、元親は織田信雄<sup>かつ</sup>・徳川家康に与する姿勢をとっていた。秀吉は織田政権末期から四国政策に関しては長宗我部攻撃の方針を貫いており、この秀吉に対抗する者といった観点から元親は信雄・家康との同盟を選択したのである。その関係で長宗我部―織田・徳川間では頻繁に書状が取り交わされていた（『長久手町史資料編六中世』）。これらの書状から天正十二年六月十一日以前に長宗我部勢が十河城を陥落させたこと、そして十河勢を「一城」のみに包囲したことが確認される。問題は、この「一城」である。八月九日付の香宗我部親泰宛本多正信書状<sup>まほのぶ</sup>によれば、十河城の陥落直前に存保が脱出したこと、また十河城の陥落後に長宗我部勢が「大智表」に侵攻したことが判明する。この「大智」は読み「おおち」に着目するならば、「大内」<sup>おおち</sup>を指していると考えられる。この「大内」を冠する地名としては讃岐東端の大内郡がある（『香川県地名』）。同郡方面に長宗我部勢が侵攻したとなると、その標的は同郡の拠点虎丸城<sup>とらまる</sup>とみるほかない。よって、問題の「一城」とは虎丸城のことと判断される。以上からすると、信頼しうる一次史料から判明するのは、長宗我部勢が十河城を陥落させ

<sup>\*</sup> 小牧・長久手の戦い 一五八四年、尾張小牧・長久手（愛知県小牧市・長久手市）などでおこった戦い。

織田信長の次男信雄は徳川家康と結び、秀吉と戦った。

<sup>\*</sup> 本多正信 一五三八―一六一六年。徳川家康の重臣。

小牧・長久手の戦い頃から側近として活躍し、関ヶ原合戦後には井伊直政らとともに徳川政権の中枢を担った。